

シラチャ日本人学校から

1. 開校にあたって

「微笑みの国」と呼ばれる東南アジアの国、タイ王国。インドシナ半島の中央部にあり、カンボジア、ラオス、ミャンマー、マレーシアと国境を接する熱帯の国である。年平均気温は約29度、面積は約51.4万km²(日本のおよそ1.4倍)、人口は約6千7百万人である。在留届を出している日本人は約4万人であり、増加傾向にある。そのタイは今、好景気に沸いている。貿易、消費動向などさまざまな指標を見ても、軒並み前年度をおおきく上回る数字が発表されている。街並みを見ても、次々とコンドミニウムが建設され、その発展のようすがうかがえる。そのような中、当然日本企業の進出もめざましく、広大な土地につくられた工業団地には、見慣れた日本企業の名前が多数見られる。

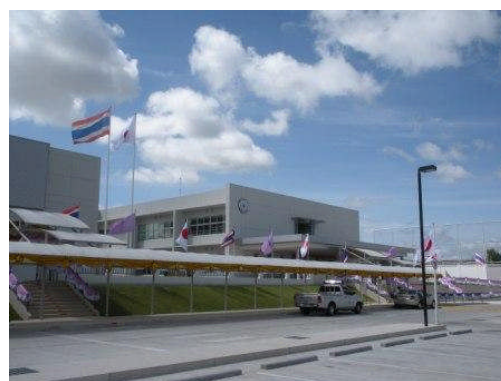


美しいタイの寺院

シラチャ日本人学校は、そうした工業団地が数多く存在するチョンブリ県のシラチャ市にある。シラチャ市は日本企業に勤務する日本人のベッドタウンとなっており、約4000人ほどの日本人が生活している。その郊外に2009年に開校された新設校である。その前身は、シラチャ・パタヤ補習校である。数年前から、日本人学校開設の話が持ち上がり、世界一の歴史と規模を誇る泰日協会学校バンコク日本人学校の姉妹校として誕生した。開校に至るまでは、地元に住む日本人の強い願いと、泰日協会学校理事会、バンコク日本人学校の先生方、地元のチョンブリ・ラヨン日本人会のみなさんの並々ならぬ努力があった。立ち上げに関わられた方々の期待と、その責任の重さを感じながら、新設初年度に赴任した文部科学省派遣の5名、バンコク日本人学校からの転任10名、そしてディレクターをはじめとするタイ人のスタッフの方々を加えた教職員で学校をスタートさせた。4月20日の開校、そこに集まった児童生徒は91人。2008年のリーマンショックを発端とした世界規模の不況の影響もあり、当初120人余りを予定していた入学・編入者数よりも少ない人数でのスタートとなった。

2. 本校の特色、児童生徒の実態

海外生活の場合、環境や安全面の関係から、日本のように子どもたちだけで遊びに出たりする機会があまりなく、生活の場のほとんどが学校と家庭の2つに限られる。家に帰れば、ほぼ必ず保護者がいる状態である(父親の海外赴任の場合、母親は専業主婦をしておられる場合がほとんどである)。休日も家族全員で過ごすことが多い。よって、日本での生活に比べて保護者と過ごす時間がとても多く、家庭での愛情をしっかりと受けて生活している。



真新しい校舎

本校へ入学・編入する前の児童生徒の状況はさまざまであり、大きく3つに分けられる。日本からの編入学、姉妹校であるバンコク日本人学校からの編入学、現地校・インターナショナル校からの編入学である。日本やバンコク校からの編入学児童生徒は、本校と同じく日本の教育環境、教育課程の中で生活してきたため、早い段階で馴染むことができた。しかし、現地校やインターナショナル校からやってきた児童生徒は、人間関係の構築、学習してきた内容の違いや進度に戸惑うことが多い。また、家庭環境による日本語習得に差があるのも事実である。国際結婚などのため、家庭での日常会話が日本語でない児童生徒がおり、日本語による読み書き、表現がスムーズにできないケースがある。このように、多様な状況にある児童生徒がともに学ぶ本校では、少人数の特色を活かし、個に応じた指導を色々な場面で展開することで対応している。各教科の授業だけでなく、休憩時間にも、教室や職員室で児

児童生徒と教員が向きあっている姿がある。また、「朝の読書活動」や全校一斉の作文指導、集会での発表活動など、工夫した教育活動を取り入れるように努力している。

日本人学校の大きな特徴の1つとして、「小中併設」がある。このことは、私が所属する中学部の生徒にとって大きなプラスの効果がある。日本の中学校では、2年生の後半から3年生が学校のリーダーとして活躍し、生徒会活動を運営していくことになるが、日本人学校の場合、9学年がともに学校生活をおくっており、中学部生徒は、中1であろうとリーダーとして活躍する機会がとても多くなる。海外赴任しておられる保護者の年齢や家族構成などの要因で、小学部児童数に比べて中学部生徒数ははるかに少なく、中学部生徒全員が、児童生徒会活動の中心となって活動するのである。こうした経験ができるのは、本校のメリットであるといえる。ただ、これによるデメリットもある。本校は、児童生徒数がまだ少ないこともあり、小学部の「児童会」と、中学部の「生徒会」が合同で活動している。そのため、小学部の最高学年である6年生の活動が中学生に牽引される形になってしまうということである。この点は本校の課題であり、今後改善していく必要を感じている。



学年を問わず元気に遊ぶ子どもたち

3 課題をふまえてのこれからの取り組み

海外にある学校、新設校という特殊な状況の中で教育活動をおこなっており、日本の学校では起こらないような課題も多く、戸惑うことも多い。それらを克服し、よりよい学校をつくり、子どもたちの力を伸ばしていきたいと考えている。

教科学習においては、「2. 本校の特色、児童生徒の実態」にも書いたように、本校編入学前のさまざまな教育環境の違いにより、日本の学校に比べて、同一学年内においての子どもたちの既習内容や習得状況の違いがかなり大きくなる。この点をふまえて、「国語力の向上」「基礎的基本的な内容の確実な定着」は、本校の大きな課題であり、学校をあげて取り組んでいる。児童生徒たちの登下校は、決められた時間のスクールバスでおこなうため、朝や放課後の時間には限りがあり、補充や個別指導をする場合も時間的な制約が大きい。「個別に残って補充しよう」とはいかないのである。時間割・時程の工夫や、学習指導の研究や体制づくりなどを進めているところである。そして、標準学力検査など全国規模の学力調査・試験において、全学年全教科で全国平均を上回ることを目標として取り組んでいる。

よりよい学校体制づくり、教職員の組織づくりも急務である。私たち派遣教員は、海外勤務と、新設校ゆえにゼロから学校をつくるという2つの「初」を経験している。また、日本各地から集まった教員集団であり、都道府県が違えば経験してきたことも異なる。そんな中で学校の仕組み、体制をつくっていくには、時間と労力が必要とされる。行事1つおこなうにしても、試行錯誤である。それぞれが持ち合わせている経験や力を出し合い、一致団結して学校づくりに邁進していかなくてはならない。毎年新しく派遣される教職員がスムーズに職務を遂行できるようにすることも含めて、日本人学校として、シラチャ校としての体制・組織の基盤づくりを進めていかなければならない。

さらに、特色ある学校づくりを展開していきたい。海外にある学校、タイにある学校であること、新設校であることを活かし、日本とは異なる環境だからこそその教育活動を進めていくことが大切であると感じる。例えば現在、現地の学校との交流活動や、校外学習でタイのさまざまな文化や伝統に触れる取り組みを行い、子どもたちの国際感覚の育成に努めている。国際理解という点においては、その材料となるものがあふれていることは日本人学校の特色であり、教育活動に活かすべきことである。もちろん海外ゆえの不便さもあるが、創意工夫でそれらを乗り越えていきたい。

新設間もない若い学校で、児童生徒数もまだ少ないが、初年度赴任教員として、学校の基盤をしっかりとつくるためにさら尽力していく決意である。